

〈実践報告〉

# 大阪芸術大学動物ジオラマ館芸大 Zoo をつくる

若 生 謙 二

## 1. はじめに 偶然の出会いから

2025年10月1日、大阪芸術大学動物ジオラマ館芸大 Zoo が誕生した。この展示館は、滋賀県信楽町に開設されていた滋賀サファリ博物館が同年5月に閉館されたのに伴い、本学に寄贈された剥製をもとに大阪芸術大学動物ジオラマ館として開設されたものである。

2022年、筆者は信楽町を移動していた際に、動物が描かれたサインを見つけて見学した。アフリカと北アメリカの野生動物の剥製がジオラマ風に展示されており、剥製の多くは、アメリカ自然史博物館の剥製にも匹敵する質の高いものであった。

筆者はご案内いただいた二代目館長夫人で経理部長の近藤富子氏に自身が大阪芸術大学教授で、上野動物園のパンダの森や天王寺動物園のアフリカサバンナなどの設計をてがげた動物園デザイナーであることの自己紹介をしたところ、高齢になり将来の館の維持に不安があるため、芸大で学生の教育のために活用していただけないかというお話しをいただいた。その後、本学院の塚本英邦副理事長と共に再訪し、二代目館長の近藤幸久氏から改めて寄贈のご意向を伺った。その後、正式に寄贈されることになり、筆者はこれらの剥製を芸大にジオラマとして展示するための設計・施工に携わることになる。

本稿では、はじめにジオラマ展示について概観し、それらをふまえた上で動物ジオラマ館芸大 Zoo を制作する考え方や構成など計画から完成に至るまでの経緯を述べる。本件の設計と施工は学校法人塚本学院から乃村工藝社に委託され、筆者はその総合プロデューサーとして設計指導と施工管理を行った。

## 2. ジオラマ展示とは

はじめにジオラマ展示の考え方について述べる。ジオラマ (diorama) は、展示物をその環境と共に三次元として表現する方法であり、歴史的事象や自然景観、都市景観などを表現する場合もあり、主に博物館の展示で用いられてきた。特に動物の生息地での暮らしを表現するために、自然史博物館で剥製を用いて表現する方法が発達した。

欧州の博物館では、動物の剥製を個別の標本として展示する方法が行われていたが、生態的な環境として展示しようとする動きがあらわれ、1815年にはロンドンのバロック博物館で最初にそのような展示が行われた。続いて、1878年に大英博物館分館のサウスケンジントン

博物館で鳥のジオラマの展示がつくられる。こうした生息地での動物群集の暮らしを再現する用語として、英語圏では habitat diorama、もしくは habitat group という表現が用いられ、日本の博物館学を切り開いてきた棚橋源太郎がこれらの展示に対して、生態展示という語を用いた。この用語は、主に自然史博物館の展示に対して用いられ、店舗などの商業的意図で展示されるものとは区別されてきた。

アメリカではじめての habitat diorama は、1889年にミルウォーキー博物館で、カール・アケレイ (Carl Akeley) がウィスコンシンの草原と森林を表現した「川のマスクラット」という展示である。その後、アメリカ自然史博物館の初期のジオラマとして、鳥類キュレーターのチャプマン (F.M.Chapman) が環境保護の目的でジオラマを取り入れ、ペリカン島のジオラマを開設する。

アメリカ自然史博物館のジオラマ展示は、カール・アケレイにより、アメリカと世界の自然景観であるバイオーム (biome: 生物群系) を表現する展示として体系化された。アケレイは近代剥製術の開発者であり、彫刻家、生物学者、自然保護家、発明家、写真家でもあるという多彩な能力を有した人物である。ミルウォーキー博物館からシカゴのフィールド博物館へ、そしてアメリカ自然史博物館へと移り、ジオラマの完成をめざしてそれを実現してゆく。

アケレイは野生動物の生息環境の保護を訴えるために、剥製によるジオラマ展示を考案し、体系化した。そのために自身で生息地に向き野生動物の狩猟を行うが、それは種の保護のためであり、種の代表としてのジオラマのモデルとして活用するためであるという考え方にたっていた。対象とした種の仲間とその生息地を護るという考え方を都市居住者や世界に訴えていくための手段としてジオラマをとらえていた。そのために観客の心に響く世界に類例のない展示をつくる必要があるとして、ジオラマ展示の制作に尽力した。

このジオラマ展示は、比類まれな剥製の再現方法と共に、剥製を展示する周囲の環境、背景、それらが一体となって完成してゆく。ジオラマ展示の精巧さは、背景画の精緻さと剥製の精巧さにある。剥製の精巧さは次のような制作方法で実現された。

動物を狩猟で仕留めると、皮をきれいに剥がして鞣 (なめ) し、図1の左にあるように、その動物のミニチュアのモデルをつくる。それを元に等身大の彫像を作成してゆく。完成した彫像を石膏で型どりし、その石膏に金属を流し込んで型をつくる。その鋳型を接合して、その上に鞣した皮を正確にかぶせてゆく。そのため、中身は中空であるため軽い。彫像は筋肉、しわ、血管の状態までも表現しているため、生きているような迫真性がある。アケレイは彫像から正確につくるという方法で、剥製の制作方法を刷新したのである。

このように迫真的に表現するという考え方の源泉は、生息地に赴いていることによる。ジオラマの背景画は、生息地の現地で描いた絵をもとに、博物館の展示の現場で再現して描かれた。迫真的な表現は、剥製、背景画、そして剥製を展示する周囲の環境との一体化にある。図2はその平面図で左側は断面図である。ジオラマ展示の隅は曲面になっており、観客は剥製を見た視線と奥の曲面に描かれた背景画を一体として眺めるため、延々と続く何十キロも



図1 アメリカ自然史博物館の剥製の制作方法  
文献1: Stephen D.Quinn, Windows on Nature より

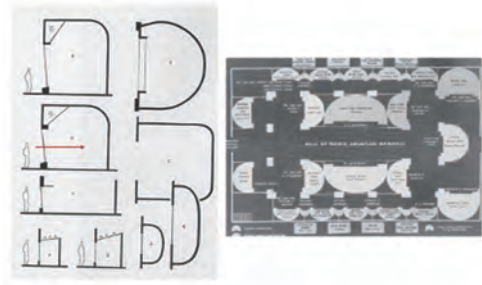


図2 アメリカ自然史博物館のジオラマの断面図と平面図  
文献2: Karen Wonders, Habitat Diorama より

先にある風景が広がるように見える。そのため、多くの事例では手前の剥製が配されたエリアを崖上にし、その奥を凹型のコンケイブ地形にして、その先に背景画を眺めるという構成にしている。

図3, 4はこのようにして制作されたジオラマ展示の事例である。図3は、イエローストーン国立公園でハイイログマが暮らす様子を表現したジオラマである。ここは奥の崖に上滝と名づけられた滝があり、その眺望地点にハイイログマが集まったという設定である。図4は、西部のヨセミテ渓谷の崖に洞窟状に広がる岩場から眼下を眺めるピューマの姿をあらわしたジオラマである。



図3 イエローストーンのハイイログマ



図4 ヨセミテ渓谷のピューマ

先の事例と共に、背景画は数十キロ先の景観を描いているが崖下のコンケイブ地形を見事に活用して、はらかな広がり感を表現している。

このように同館のジオラマ展示は、透視画法で精緻に描かれた背景画のもとに、精巧に制作された剥製の動物を配して、臨場感のある景観としての展示を創出している。

### 3. 背景写真の撮影

筆者はジオラマ展示の設計にあたり、ジオラマ展示では世界で最高峰となる前述したアメリカ自然史博物館のジオラマ展示に劣ることのないような展示にすることをめざし、その手法を現代の技で実現することに挑んだ。同館のジオラマ展示の素晴らしさは、2章で述べたように、剥製制作の精巧さと一体となった背景画にある。この背景画は透視画法で描かれており（図5）、狭い室内にもかかわらず、背景画により広大な奥行きと広がりを感じさせる表現となっている。しかし、この透視画法で制作するには、生息地の調査を踏まえた上で描くことが必要になるため、膨大な時間が必要になる。では、どのようにして背景の奥行き感と広がり表現すればよいのか。

筆者はすでに(株)翔設計と共に実施した恩賜上野動物園のパンダの森の展示設計で、屋内展示の背景に写真を配する手法を用いて成功してきた（図6）。剥製のジオラマでは、背景に写真を用いることは効果的である。パンダの背景写真は、パンダ写真家が撮影したものを使わせていただいたが、ここではそれに該当するものはないため、展示する剥製の生息地である、アフリカのサバンナと森林を訪れ、自身で背景の景観を探し、撮影することにした。

撮影は、キリン、シマウマ、シロサイやエランド、クードゥー等が生息するアフリカのサバンナと、ボンゴやダイカーなどが生息する森林を対象に行うことにした。サバンナはケニアのマサイマラ国立保護区（Maasai Mara National Reserve）を選定したが、ボンゴの生息環境の写真撮影の候補地選定では、実際にボンゴが生息する地域はコンゴ民主共和国であるが、政情不安で入国は困難であるため、隣接するウガンダのブウィンディ原生国立公園（Bwindi Impenetrable National Park）とマウンテンボンゴ（*Tragelaphus eurycerus isaac*）が生息するケニアのアーバーディア国立公園（Aberdare National Park）を訪問し、撮影することにした。撮影機材は写真学科から1億画素という高解像度を有する富士フィルムの機材を借用して用いた。撮影にあたっては、渡航前に大学付近の樹林地で何度も撮影の練習を重ねて挑んだ。

2024年8月6日から14日間の予定で渡航することになった。ブウィンディ原生国立公園は



図5 ジオラマの背景画を描く様子



図6 上野動物園のパンダの屋内展示の背景写真

文献2より



図7 沿道でヴィクトリア湖の魚を売る人



図8 ブタをバイクで搬送する人



図9 ブウィンディ原生国立公園内のロッジ

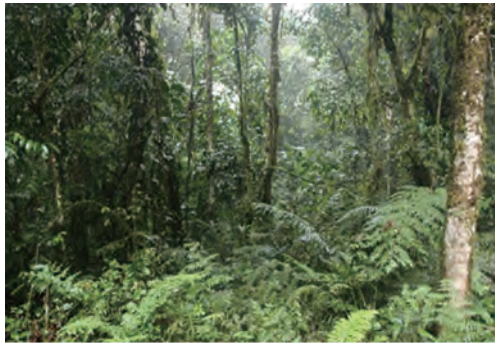


図10 ブウィンディ原生国立公園内の森林

標高 2,000m 前後の高地にあり、ウガンダのエンテベ空港から車で 10 時間の移動である。沿道には、ヴィクトリア湖で捕った魚を販売する人や、ブタをバイクで搬送する人たちなどの暮らしの様子を垣間見た (図 7, 8)。このような長時間の移動を経て、山道を超えて山地の森の中にあるロッジにたどり着いた。ロッジは木造で森に包まれた環境の中にある (図 9)。このロッジではマウンテンゴリラ (*Gorilla beringei beringei*) の観察が可能のため、欧州からの利用客も多い。ロッジのバルコニーで夕食を済ませた後、部屋のベッドに入ると、足元に何か暖かいものがふれた。動物でも入ったのかとよく見ると、湯たんぽであった。この地は標高が高いため、8 月でも寒く暖をとることが必要であった。

翌朝、レインジャーと共にブウィンディ原生国立公園の山に登り、ボンゴの森の背景にふさわしい景を探しながら撮影を行った (図 10)。撮影のための山行きは 7 時間に及んだ。翌日も別のエリアでボンゴの背景となる写真の撮影に取り組んだ。これらの撮影を終えて、ヴィクトリア湖に近い低地に移り、低地林の撮影を行った。

これらの撮影を終えて、ドライバー兼ガイドと共にケニアのマサイマラ国立保護区に移動した。私にとっては 30 年ぶりのマサイマラであったが、当時よりも建築物が増えているという印象であった。この時はオグロヌー (*Connochaetes taurinus*) の大群がセレンゲティ国立

公園 (Serengeti National Park) から移動しており、そのため他の動物は少なかった。ここでも目的は動物の観察ではなく、キリンやシマウマのジオラマの背景となる景の撮影である。私はガイドの運転するジープの後部座席に陣取り、ひたすら背景にふさわしい風景の探索を行った。一面の草原だけではなく、適度な起伏やアカシアの樹が点在している必要がある。青空と雲のバランスも求められる。ふさわしい景に遭遇すると、車を停めて撮影にかかる。このようなことを数十回も繰り返して多くの景を収集した。ある時、ヌーの群れが一目散に走り出したので、よく見ると、チーター (*Acinonyx jubatus*) が俊足で追いかけて、一頭のヌーの子どもを捕まえていた。もう一度、ビデオの照準をあてると、チーターだけが立ちすくんでいた。狩りに失敗したようであった。

翌日は景の変化を探すために、マサイマラ国立保護区の西部に向かい、コピエ (kopje) という岩山のあるエリアにでかけた。いくつかのコピエと草原の景をカメラに収めて、保護区の高台のエリアに移動した。少し高い地点から眺望の広がるエリアで、サバンナの雄大な景が眺められた。アカシアの疎林もあり、背景写真にふさわしい多くの景を撮ることができた。

マサイマラ国立保護区での撮影を終えて、マウンテンボンゴ (*Tragelaphus eurycerus isaaci*) の生息地である森林の景を撮るために、ケニア東部の山地にあるアバーディア国立公園に移動した。ここでも深い森の中にあるロッジ、ジ・アーク (the Ark) に宿泊し、翌朝からジープで森の景の撮影にでかけ、変化のある多くの景を収集した。こうして多くの景を撮影して帰国の途についた。

#### 4. 制作の過程

帰国後、撮影したデータを用いて、ジオラマの背景写真の制作が行われた。ジオラマでは、生息地調査の成果をふまえて、アフリカの三つの景をテーマとした。アフリカの草原、アフリカの森林、岩場のある草原の景である。

本展示の中心はジオラマであるので、その制作過程について述べる。それぞれのジオラマでの剥製の種と数、その形態は決まっているので、それらをいかに配置してゆくかは、背景写真の画像によって決まる。そのため前面に配する剥製の位置と、選定した背景写真の画像の大きさや画像の内容を確認する作業では、動物の模型を配して、何度も景の確認を行った。また、アフリカの草原の景では、草原の広がり感を醸し出すために、地平線の位置を観客の視線高との関係でどの高さにするのかは重要な事項であり、これらをふまえた上で写真の位置を決めていった (図 11, 12, 13)。

背景写真が決まれば、プラスターボードの上に拡大した写真を添付したパネルを展示ブースの背面に設置する。次に展示ブースで剥製を配する地盤の高さ出しを行う。本展示では、動物を見下げて眺めることがないように、剥製側の地盤高を観客の側よりも 50-60cm 高くしている。動物を観客の視線と同じか少し高く配することで、動物は迫力をもって視線に迫る。

これらの下準備が整った段階で心を配ったのが、背景写真と剥製動物を配する前景とのつながりである。背景写真との一体感がなければ、アメリカ自然史博物館をこえるジオラマは



草原（図11、上）、岩山のある草原（図12、中）、森林（図13、下）となる景のそれぞれの背景写真

成立しない。一体感を成立させる重要な事項は、背景写真と前景のジオラマとの接合部位である。

前景のエリアの植生も一体感を育む重要な要素になる。筆者らはサバンナの植生を再現するために、淀川の河川敷を調査し、イネ科草本を採取して擬草のモデルとした。背景写真との境界には、これらの擬草を配して、接合部位の一体化につとめ、サバンナの草原のエリアのジオラマを制作した。キリンは5mをこえる高さで、屋内の展示に用いるのは困難であったが、足の高さを調整した上で、段丘崖を登るという設定で景を創出した。

ボンゴの暮らす森林エリアでは、撮影した森林の景を背景にして、森の中から現れたという設定で、ボンゴやオリピなどの剥製の配置を行った。この背景の写真は撮影した多くの中から下部に地面の見えるものを選定した。森の中の空地に現れたという設定である。背景写真では全体が森林であると、前面の剥製の設置部分にも多くの低木を配置しないと一体感を醸し出すことができない。低木の多くの擬樹を配することは制作の費用と時間を要するだけで、動物の姿を見ることも困難になる。そのため、裸地の地上面を入れた写真を用いて、前景との接合部の一体化に努めた。地面は森林土壌のように造形し、落ち葉を適度に配し、数本の擬樹を配することで、接合部との違和感を緩和した。



図 14 エントランスのロゴマーク



図 15 シマウマを襲うライオンの剥製

最後の岩場のある草原のエリアでは、最初の草原のエリアとは異なり、草原の岩場を前にして、動物が集う景を構成した。草原の景とは違い幅が広いので、広がりを感じさせる展示となっている。

## 5. 動物ジオラマ館芸大 Zoo を見る

それでは完成した展示を眺めてみることにしよう。本展示館の入り口である東側の壁面には、きれいなロゴマークがある（図 14）。これは本学デザイン学科長の高橋善丸先生に制作いただいた本館のロゴマークである。高橋先生にはジオラマの動物のシルエットでの表現をいれていただきたいとお願いした。アイベックス (*Capra ibex*) の角を力強く表現した Zoo の文字と背景のシルエットはジオラマ館の展示をよく表現しており、つよくインパクトのあるものになっている。

扉を開けてジオラマ館の中に入ると、受付の机があり、その奥にはライオン (*Panthera leo*) がシマウマ (*Equus burchellii*) を襲っている剥製が目に入る（図 15）。手前にはトラ (*Panthera tigris*) の姿があり、右手には本館建設の経緯と目的を記したサインがある。

その右に目をむけると、アフリカサバンナのジオラマが広がる（図 16）。広大な草原を背景にキリン (*Giraffa camelopardalis*) が段丘崖から登る姿が現われ、その前には駆け寄るシマウマ、右手にはメジャーハーテビースト (*Alcelaphus buselaphus*) とゲレスク (*Litocranius walleri*) の姿がある。左手前には大きなシロサイ (*Equus burchellii*) がおり、奥に広がる



図 16 アフリカサバンナの景



図 17 アフリカの森の景

草原には点在するアカシアの樹がサバンナの様子をつたえる。動物のいる地面にもイネ科草本が配されているので、奥の風景との一体感がある。このシーンに迫力を感じるのは、動物の側を高くしていることと動物との間にガラスの境界がないためである。右手の壁にはこのシーンを解説するサインと共に、「ジオラマとは」という解説がある。



図 18 岩場のある草原の景

左に目をやると、アフリカの奥深い森林の草食動物のジオラマが現れる（図 17）。アフリカのウガンダの多くやコンゴは、高地や丘陵地の森林で鬱蒼とした樹木に覆われ、ここには森林性の多くの動物が暮らしている。このシーンでは中央の奥に雌雄のボンゴ（*Tragelaphus eurycerus*）が美しい姿を現す。ボンゴはジャイアントパンダ、オカピ、コビトカバと共に世界 4 大珍獣とよばれる珍しい動物であり、今日ではわが国の動物園でもその姿を見ることはできない。手前にはレッドダイカー（*Cephalophus natalensis*）、レッドフランクダイカー（*Cephalophus rufilatus*）、ピーターズダイカー（*Cephalophus callipygus*）などと共に、スタインボック（*Raphicerus campestris*）やオリビ（*Ourebia ourebi*）がこちらを伺う。森の中から地面の広がりにてきた動物は今にも動き出しそうである。右手には、動物の線画のシルエットでその名前を記したサインと解説がある。受付を通り抜けて、奥に進み右手を見ると、岩場のある草原の景が広がる（図 18）。アフリカサバンナにはコピエとよばれる岩場があり、それらは動物のすみかにもなっている。ここにはコピエのある草原に集うクードゥー（*Tregelaphus strepsiceros*）、ジャイアントエランド（*Tragelaphus derbianus*）などの大型の



図 19 頭部の剥製 1



図 20 頭部の剥製 2

草食動物とローンアンティロープ (*Hippotragus equinus*)、コーブ (*Kobus kob*) 等の草食動物と共に、右端からオリックス (*Olyx gazella*) がかけよる姿が見られる。延々と広がる草原に



図 21 日本の動物の剥製

はゆるやかな起伏もあり、はらかな奥行きを感じることができる。

岩場のある草原の後ろ側の壁面には、種ごとの頭部の展示がある (図 19, 20)。ここではセーブルアンティロープ (*Hippotragus niger*)、エランド、アフリカスイギュウ (*Syncerus caffer*)、オリックス、ハーテビースト (*Alcelaphus buselaphus*)、オグロヌー (*Connochaetes taurinus*)、ウォーターバック (*Kobus ellipsiprymus*)、イボイノシシ (*Phacochoerus*) の頭部を二段に配し、その奥には、大きなへら状の角をもつヘラジカ (*Alces alces*)、トナカイ (*Rangifer tarandus*)、ダールシープ (*Ovis dalli*)、ホンドリカ (*Cervus nippon*) などの頭部を配した。

歩みを進めた右側には、日本の動物の剥製のエリアを設けた (図 21)。こちらの動物は初代館長の近藤幸彦氏が狩猟活動の初期に、三重県や滋賀県で狩猟したものを中心に展示している。下段にはアナグマ (*Meles anakuma*)、テン (*Martes melampus*)、イタチ (*Mustela itatsi*)、タヌキ (*Nyctereutes viverrinus viverrinus*) と北海道のキタキツネ (*Vulpes vulpes schrencki*) を配している。上段には、ヤマドリ (*Syrnaticus soemmerringii*)、キジ (*Phasianus versicolor*)、オシドリ (*Aix galericulata*)、ヤマシギ (*Scolopax rusticola*)、コジュケイ (*Bambusicola thoracicus*)

と北海道のエゾライチョウ (*Tetrastes bonasia*) を配している。

最後の部屋に進むと正面にワピチの雄の決闘のシーンが現れる (図 22)。この部屋には、床面に種ごとの剥製を配して、壁面に頭部の剥製や毛皮を配している。正面に見られるワピチ



図 22 ワピチの決闘



図 23 有蹄類の剥製



図 24 クマ類の剥製



図 25 シカ類の剥製

は北東アジア産 (*Cervus canadensis xanthopygus*) と北米産 (*Cervus canadensis canadensis*) である。右端からナイルワニ (*Crocodylus niloticus*) に続いてシベリアアイベックス (*Capra sibirica*)、プロングホーン (*Antilocapra americana*)、マルコポーロシープ (*Ovis ammon polii*)、ヒマラヤタール (*Hemitragus jemlahicus*)、アルタイアルガリ (*Ovis ammon ammon*)、シロイワヤギ (*Oreamnos americanus*) 等の有蹄類を配し (図 23)、続いてアメリカアナグマ (*Taxidea taxus*)、ヒグマ (*Ursus arctos*)、ホッキョクグマ (*Ursus maritimus*)、アメリカクロクマ (*Ursus americanus*)、コヨーテ (*Canis latrans*) に続き (図 24)、ヘラジカ、トナカイ、ワピチ (*Cervus canadensis*)、イノシシ (*Sus scrofa*)、ホンドリカ、エゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*) 等のシカの仲間を配した (図 25)。壁面には右から、ホッキョクグマ、アメリカクロクマ、イボイノシシ (*Phacochoerus aethiopicus*) の頭骨をテーブルの上にケースで展示し、その背景に、ヘラジカの角、コヨーテ、ボブキャット (*Lynx rufus*)、ライオンの毛皮を広げて展示している (図 26)。続いて、奥の壁面にはインパラ (*Aepyceros melampus*)、ブッシュバック (*Tragelaphus scriptus*)、グラントガゼル (*Nanger granti*)、リードバック (*Redunca*

arundinum)、ハーテビースト、トムソンガゼル (*Gazella thomsonii*)、インパラ、ウォーターバック (*Kobus ellipsiprymnus*) 等のアフリカの有蹄類を並べて展示している (図 23)。角の違いで種を同定できるので、わかりやすい展示となっている。続いてホッキョクグマ、アメリカクロクマの毛皮を広げて展示し、エゾシカ、ホンドリカの頭部の展示、そして最後にシマウマの毛皮を広げて展示している。

それぞれの展示には、種を線画のシルエットで種名をあらわしたサインがあるので、わかりやすく種名を知ることができる (図 27)。帰路につく右手の壁面には、私の経歴と共にこの制作に携わった人々の氏名が記されたサインが掲載されている。

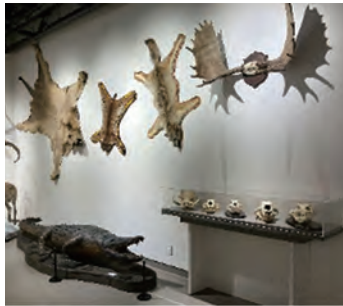


図 26 頭骨と毛皮の展示



図 27 シルエットの種名サイン

## 6. おわりに

大阪芸術大学動物ジオラマ館がアメリカ自然史博物館と異なる点は、背景を絵ではなく生息地で撮影した写真で表現していること、そして剥製と観客の間にガラスがないことである。ガラスがないため、観客は至近距離で剥製に向き合うことができ、動物の姿に肉薄することができる。

10月1日に開館した本館の展示は、多くのメディアで紹介され、読売新聞大阪版では、夕刊の社会面の一面にカラーで大きく紹介された<sup>3)</sup>。本館は授業期間中の平日火曜日から金曜日の12:00から13:30までは学内の関係者だけではなく、学外からの見学者も見学が可能である。この記事を読まれた初老の夫婦は、守口市から見学に来られ、感動しておられた。事前に申請して見学に来られた近隣の小学校や幼稚園の団体にも利用されている。休み時間には学内の多くの教職員や学生も見学に訪れている。私が驚くのは教員の利用が多いことである。美術学科、工芸学科やデザイン学科の教員らは前述の休憩時間帯の見学時間以外にも授業時間中に庶務課に申請をしたうえで、学生を引率して見学に来られている。絵を描くことが多いキャラクター造形学科やデザイン学科の学生らはスケッチブックを携えて訪れ、動物を観察して描いている。工芸学科ではこれまで動物を描くのに、天王寺動物園を訪れて描いていたが、今では学内で身近に描くことができる。驚いたのは音楽学科の作曲の先生が学生を引率して来られたことである。ジオラマを見て感動する体験は、作曲活動にも大きな効果

を醸し出すとのことであった。見る人をひきこむ感動的なジオラマは、見る人々を挑発して心に変化を生み出すのであろう。

本館の剥製は偶然の機会から芸大に寄贈され、ジオラマとしてつくられることになった。多くの学科の学生や見学者がその刺激をうけて作品をうみだす契機になることを祈っている。剥製を寄贈いただいた滋賀サファリ博物館の近藤館長、そしてこのようなジオラマ館の制作の機会をいただいた学校法人塚本学院に感謝の意を表したい。

大阪芸術大学動物ジオラマ館の制作には、多くの方々の参画をいただいた。(株)乃村工藝社からは本学デザイン学科出身の満長正明氏と共に井上禎人氏が当初から設計事業を担当され、ともに議論を行いながら仕事を進めた。この設計事業には亀山裕市氏、今野優摩氏、末寄武氏、森本浩一氏らも参画された。主に施工監理を担当された同社の片岡秀之氏は本学デザイン学科の出身である。展示の施工には宝島造形有限会社の中土井佑誌氏、増永歩香氏、藤井元希氏、米矢康展氏、廣岡敬介氏らにお世話になった。また、主に背景写真の編集に携わっていたいただいたのは朝比奈デザイン株式会社の朝比奈雄二氏、関弘美氏である。剥製はきれいに仕上げられているが、これらを丁寧に修復していただいたのは、本学美術学科出身で浜口標本の浜口美幸氏である。また、31号館の建物を修復して展示館として活用できるようにしていただいたのは大成建設(株)である。

本館はこれらのすべての方たちの協力によって完成したのであり、参画されたすべての方々に謝意を表したい。

## 文献

- 1) Stephen Christopher Quinn (2006) : Windows on Nature, The Great Habitat Dioramas of the American Museum of Natural History, Abrams, New York, in Association with the American Museum of Natural History
- 2) Karen Wonders (1993) : Habitat Dioramas, Illusion of Wilderness in Museum of Natural History, Acta Universitatis Upsaliensis, Figura Nova Series 25
- 3) 読売新聞大阪版、2025年10月4日

